蠅[[1]](#footnote-1)

香山光郎 作　朴性圭 繪

私ほど腑甲斐ない男は稀であらう。大戰爭のこの時節に、何一つお役に立つことも出來ない。

「今日は勤勞奉仕です。甑山街道の修繕工事です。誰か一人出て下さい」

愛國班長は觸れ廻つた。

「杏の木のところに、七時までに集合です」

若い班長は張り切つてゐた。

私は半ズボンに半袖、運動靴を履いて、中學に行つてゐる子供の、カンカン帽といふ装束で、定刻の十分前頃、指定の場所へ行つた。

已に倔強な若者が二三人集まつてたばこを吸つてゐる。

「お早うござんす」

若者たちは、私の年に敬意を拂つて、煙管を隱してゐた。

「やあ、お早う。そんなことしないで、煙草を吸ひたまへ」

私はかういふと、自分でも煙草を一本出して、わざと若者の煙管の火を借りた。若者たちは、私に許されると、素直に煙管を横に向けて、すつぱすつぱと煙を吐いてゐた。

「先生は、どこへいらつしやるんですか」

愁心歌が上手で、冗談の好きな、馬子の龍三が、皮肉な笑を含んで私に訊いた。

「何をいつてゐるんだ。僕も道路工事の勤勞奉仕に行く[ん]ぢやないか」

と、自分の身装を見廻はした。

「四十五歳以上の人は駄目ですよ」

龍三は、自分の若さを誇るやうに、てつとニコチンの唾を地べたに吐いた。

「君、さう痰唾を吐き散らしちやいかん」

私は龍三をたしなめた。

「へいへい、どうも癖になりやして」

と龍三は頭を掻き、痰を草靴履の足踏み消しながら、

「これでも、家内のやつが手鼻を噛むのを見ると、眼玉が跳び出るほど叱りつけるんですがな」

といつて、笑つたが、私には、それが、私を皮肉るやうに聞えた。

女も、子供も來た。大人は稼ぎに出かけたのだらう。

「チビ。お前なんか、來たつて何になるんだ」

と寅成といふ、力自慢の男が、ミロギといふ十四五歳の男の子の、顔を平手で、ぐいつと押へつけた。

傍に居つた、二十前後の女が、くすつと笑つてゐた。自分もあてこすられたと思つたのだらう。やがて班長が、班員の驅り出しを終へて戾つて來た。

「皆さん揃ひましたかな。おつと、徐さんに鄭さんが見えてないぢやないか。ミロギ、お前一走り行つて來ないか。早くこいつて、皆が待つてゐるつて。チゲとシヨベルを持つて來るのを忘れるなつて」

「うむ」

ミロギのチビは、自分が役目をいひつかつたのが嬉しいのだらう、承知したとばかり、走り出した。

「おい寡婦男にな、煙草もつて來るの忘れるなつて。聾にはな、あの聾の耳は家に置いて、聞える耳をつけて來いつて、わかつたか」

龍三は大声でどなつた。

「ほんとに鄭の野郎、いつも煙草を忘れては、おい一服と來るからな」

「あの野郎、わざつと忘れるんだよ。あの野郎の家へ行つて見い、不老煙がしこたま買溜めてあらあ」

ヌロギ（黄色）と綽名されてゐる、徳心がつぶやいた。

「時に、先生は」

と班長が、私に向いた。

「僕も出るんだよ。僕ぢやいけないかな」

「先生は五十以上だから」

「五十以上でも、ミロギがやる位はやれるだらう。だつて他に行く者がないぢやないか。僕で勘辧してくれたまへ」

班長は、困つたといふ顔付きで、じろじろ私を見てゐる。私の白髪頭や、顔の皺や、骨と皮とばかりの貧弱な體格を見てゐるのであらう。私は何だか、きまりが惡つたが、

「何でもやります。土を掘るのでも、運ぶのでも。決して君たちに迷惑はかけぬ。現場で打倒れて、君たちに擔いでもらふほどの耄碌でもないぢやないか」

と見榮を切つた。

「いや、先生はどうぞやめて下さい」

とが、一歩私に歩みよつて來た。

「第一、外聞が惡いや。第二區四班の奴等は、白髪の老人を引つ張つて來たといはれちやあ、若い衆の面目が潰れます。それに先生のやうな方が、來てくれると、第一仕事の邪魔になりますよ」

と、私の背を押さんばかりである。

「邪魔になる？なぜ僕が邪魔になるんだ。これは聞き棄てならぬぞ」

私は怒つた風をして龍三を睨んだ。實際若者たちに、人間並みに取扱はれないのが、情けなくもあり、癪にも觸つたのである。

「邪魔になることがあるんです。先生のやうな御老體が傍にいらつしやつたんでは、われわれの好きなおしやべりが出來やしませぬよ、窮屈で、すぐ草臥れつちやいまさあ。さうぢやないかな」

龍三は皆に同意を求めた。

皆は、くすと笑つた。

なるほどさうでもあらう、と思はれた。年寄が、しかも私のやうに、至つて融通の利かない年寄が、傍にゐたのでは窮屈でもあらう。若者の好きな、女の話もしやべれまい。年寄の惡口は尚更遠慮することだらう。私がついて行くことは、この若者たちから、二つの楽しみを失はせることになる。

「よし、そんなら、僕は行かぬ」

と、私が言ひ切ると、若者等はパチパチ拍手をした。

「たゞ一つ、君たちにお願がある。君たちは汗水垂らして働いてゐるのに、僕だけが安としてゐるわけには行かないんだ。僕は今日一日、班内の蠅を取るとしよう」

私はかういふ提案をした。

「はゝゝゝ。これは面白い」

誰かゞ頓狂な聲を上げた。皆も笑つた。

「ぢや、皆さん、賛成だね？」

「はい、賛成々々」

「それでは僕は今日一日班内の蠅を取る。それについては、皆さんは、私が、皆さんの家のアンパン（奥座敷）や䑓所へ入ることを許して貰ひたい」

この第二の提案も、一同の爆笑の中に承認された。

聾の徐も、寡婦男の鄭も來た。鄭は機織が業で、男やもめ暮らしであるが、人間は女々しく、商賈も、女性的だといふので、寡婦男といふのである。

「よう寡婦さん」

と皆が勸迎のからかひを送ると、鄭はにやにやしながら、馬鹿叮嚀に、一同に挨拶をする。

「今日は聞える耳を持つて來たかね」

と龍三は、聾の徐の耳に口を當てゝ、大聲で叫ぶ。

「聞きたいことだけを聞く耳を持つて來たよ。お前たちの口でひる屁までも聞いてた日にや耳が十あつてもやり切れんからな」

徐さん、仲々毒舌である。私も快く笑つた。

「さあ出發。では、先生[は]蠅を」

と、いひ棄てゝ、一同は笑ひさゞめきながら甑山街道の方へと、姿を消した。

後に取り殘された私は、ほんとうに、人生に取り殘されたやうな氣がした。私は急にふけたやうで、若者たちの愉快に働いてゐるのを遠目に眺めてゐる親爺の氣になつた。

「ようし。おれも仕事に取りかゝらう。若い者どもが、歸るまでに、班内の蠅を一匹殘らず取り盡してやらう」

かう、腹を定めると、何んだか、一廉の英雄になつたやうでもある。

「ぴしやつ、ぴしやつ」

私はまず、私の家の蠅を取り始めた。

蠅を取ることには、私は相當の自信をもつてゐる。今までに恐ら[く]數十萬の蠅を取つたはづだから。第一、蠅取りの時刻であるが、朝日が東向の壁に、夕陽が西向の壁に斜に照りつける時刻が一番よい。蠅どもは寒がりやで、夏でも、朝夕は日向を好み、日當りのよいところにたかつて、揉手をしたり、揉足をしたりして、休養を樂しんだり、戀愛をしたりするものである。その時を覘ふのであるが、たゞ一つ、困ることは、この時刻には、蠅はしばしば貪慾から離れて、いはゞ無念無想の境地にあるが爲に、仲々敏感で、蠅叩の影が動いても、直ぐ警戒する。また、寝足り、或は喰ひ足りた後であるから、とても動作が機敏である。だから、この時刻の蠅を取るのには相當、修行を要することいふまでもない。

食べ物に熱中してゐる時、蠅はもつとも弱い。彼は、貪欲そのものとなつてゐるからである。恐ろしい、死の霹靂たる、蠅叩きが頭上咫尺のところに近づいて、今に打下ろされんとい[ふ]危機一髪の場合にも知らぬ顔で貪り食べてゐる。知らぬ顔ではない、ほんとうに知らないのである。彼の貪慾は、彼のあの無數の眼を暗ましてゐる。うつゝを抜かすといふものだらう。かういふ時の蠅は、子供だつて取ることが出來る。そつと後足を抑へても、やつこさん、五月蠅さうに、押へられた脚を引くだけで、飛び立たうともしない。よしんば、蠅叩きの一撃で、直ぐ隣りの同胞が、死の痙攣を起してゐるのをまのあたり[に]見ても、こいつ、一寸逃げてはまた戾つて來る。食べさしの味が忘れられぬのだ。

二度目の打撃を、危いところで免れると、さすがに彼も、ぶうと羽搏[[2]](#footnote-2)して、高く飛び、遠くへ逃れて、人間の手の届きさうでないところに止まる。しかし、彼は、今しがた食べさしの物から目を離さない。その眼は遂に、三度彼を、蠅叩の危険の下に誘ふのである。飛び戾つて見れば、同胞の屍があたりに累々と散亂してゐる。しかし、彼はふてぶてしくも、またまた、貪欲を擅にする。如何に下手な人間でも、二度も打損じたら三度目には必死となる。

「ぴしやつ」

必中の一撃！彼は身首共に潰れて、あゝ今や亡し矣となるのである。そのおいしかりし味はいづこ。彼はいづちより來り、何事をなし、いづちへ去りしや。

蠅とても、皆個性がある。輕彈みなるあり[、]しつこきあり、猪突的なるあり。蠅は概ね輕躁な虫であるけれども、たまには悠揚な風格を備へたものもある。かういふものは、餘程思慮深いらしく、一度懲りると仲々、そこへは寄付かない。

蠅たちも天下の大勢といふものを察すると見える。私が蠅叩きを振つて、䑓所などへ入ると、始めの中は、たゞ、ぶうと飛び上るだけであるが、數十百匹の死骸が横はると見ると、形勢の尋常ならぬに氣づくのであらう。天井とか、隅つことか、蠅叩きなる怪物の届きさうでないところに避難して、神妙に天下の形勢を觀てゐるのである。その中には、大悟徹底するものもあつて、奮然と執着を離れて高飛してしまふものもあるが、かういふものは、人間界に悟つたものゝ稀であるが如く、極めて稀であつて、さすがに蠅叩きを振翳して追ひかけるに忍びないものがある。蠅叩そのものの上に止まるとか、蠅叩きを持つた手に止まるなど、皮肉もある。私は愚弄されたやうな感がする。

私は班長の家から、馬子の龍三さん、力持の寅成の家、寡婦男の鄭さんの部屋といふ風に十軒十三世帶を廻つて、遺棄屍體計七千八百九十五匹の蠅の叩き殺しが完了したのは、午後四時過ぎであつた。私は汗びしよとなつたは勿論、手も脚も綿のように疲れて、へとへととなつた。一つ叩いて二つも三つも一緒に殺せる場合もあるが、それはざらにあることではない。一歩動いて、一振りをして一匹を取るのが定法である。試みに素手で七千八百回振つて見るがよい。劍道の名人でもない限り、きつとへたばるであらう。しかるに蠅を殺すには、心の緊張が要る[。]生物を覘ふのであるから、必殺の意氣が要るのだ。氣づかれといふこともあるはづである。神経細胞の消耗だ。そればかりではない[。]蠅も生物である。彼には生命があり、心がある。その心たるや、お釋迦さまの御説法を待つまでもなく、われわれ人間の心と變りはない。生きたい、樂しみたい。愛したいのである。死にたくは毛頭ないのだ。彼等の種族的歴史だつて、われわれ人類の歴史に劣らず古いであらう。人間の住むところ必らず蠅は住んでゐた。その蠅を叩き殺すのであるから、氣が引ける殺生だ。殺生には違ひないのだ。

しかし、昔からどれだけ多くの人間が、蠅によつて侮辱され、蹂躙されたことであらう。彼等は、糞便の中から出て來て、身體も足も洗ふことなく、われわれの食物の上に乗る。そして、われわれが箸を取る前に、無遠慮にも食べる。不潔と病菌とを代償として、後に殘して立ち去るのであるが、さて彼等はいづくへ去るか。彼等は敢へて、われわれの頭上を蹂躙し、眼を、唇を蹂躙するのである。何んといふ侮辱であらう。それのみかは。彼等の傳播した病原菌のために、幾百億萬のわれわれの祖先や同胞が病で倒れたことだらう。彼等を生かし置きたらんには、われわれの子孫にも、同様の災を及ぼすことであらう。

「さうだ。殺すことだ。撲滅することだ。日本中から蠅の種を絶やせ。世界中の蠅を絶滅せよ。彼等をして、よき生命に生まれ代らしめよ」

これが、私の蠅殺しの哲學である。

勤勞奉仕の若者たちが、歸つて來たのは、七時も過ぎて、夕日が紅く裏山の頂上を染めた頃であつたが、彼等は、妻子と夕餉の膳に向ひながら、私の蠅取り姿を、いろいろと噂したことであらう。私が、身體中汗になつて、蠅を追かけ廻してゐる圖が、滑稽であつたのかも知れぬ。しかも人の家の奥座敷や䑓所にまでも踏み込んだのだから、婦たちは、この年寄り、氣が觸れてゐるとでも思つたらしく、くすくす笑ふものもあれば、隣の家へ逃げこむ若い妻さへあつた。

或家では、私を氣の毒に思つたのだらうか、小麥の煎餅と、生瓜の生物とを、ちやんと膳に並べてもつて來てくれたが、私は、

「蠅のゐる家の食物は食べませぬ」

と不愛想にいつてやつた。私は蠅に對する敵愾心に燃えて、氣がいきり立つたものと見える。しかし、そのことばは、お釋迦さまの教だ。

私は、「必殺の構」といふことを、念頭に置いて、緩む心を引き締めた。見敵必殺の軍人精神を學ぶつもりで、一匹の蠅を四五分も追撃したこともある。大の五十男と、蠅との戰爭であるから、滑稽じみるのも無理はないが、私のやうな腑甲斐のない男は、蠅叩きのことでもなければ、見敵必殺の氣持を味はふ由もないではないか。

子供が学校から歸つたから、私は今日の私の戰闘のことを物語つたら、子供は、口の中に含んでゐた御飯を吹き出して、笑ひこけてしまつた。私も自分の、糞眞面目さ加減が、おかしくなつて、笑つた。しかし愉快だつた。

夕食後、私は、蚊やりの艾の煙に咽びながら、私が叩き殺した蠅の中の、特色のあるものゝことなど想ひ返してゐた。一日の戰闘が濟んで一休みの時の勇士の氣持はこんなものかな、など思つたりしてゐると、まづ班長がやつて來て、

「先生、御苦労様でした。家にも蠅は一匹もゐませぬ。お蔭さまで、五月蠅くない食事が出來ました」

と、お禮をいつてくれた。龍三も、寅成も、寡婦男も御禮にやつて來たし、さつき私に小麥の煎餅を勸めた婦人まで、御禮に來てくれた。蠅のゐない夏の食事といふものを、彼等は初めて味つたのである。

　私はいたく滿足した。私も何かに役に立つた氣がして、その夜は興奮して眠れなかつた。お蔭で肩腰が痛んで三日ばかり、寝てしまった。

1. 『國民総力』1943年10月1日号34頁〜37頁 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「羽搏」は羽ばたきのこと。 [↑](#footnote-ref-2)